

2009年度は1名の学生を海外提携機関に派遣しました。

名 前	派遣先	派遣期間
藤川 美代子	中山大学 中国非物質文化遺産研究中心	2月27日～3月18日

## 中国広東省の水上居民を訪ねて



藤川 美代子(歴史民俗資料科学研究科 博士課程3年)

漁業や水運業を営みながら船で暮らす人々は、多く Sea Nomads、漂海民、水上居民、水上生活者などと呼ばれる。中国において、こうした人々の居住地域は福建・広東・広西の海や河川に最も集中している。彼らは、歴史上「蜑民」・「疍民」・「疍戸」などと称され、一般的に陸地に定住する人々からの差別と排除を経験してきた。また、その起源が少数民族とされるなど、中国社会における多数派の漢民族とは異質の存在として位置づけられることも多かった。しかし、1950年代に全国各地でおこなわれた民族識別工作で各地の蜑民は漢民族と認定され、その呼称も水上居民へと改められた。これまで、水上居民と呼ばれる人々に関する研究は、主に香港や広東省を中心とする広東研究の中でおこなわれてきた。2007年から、福建省南部を流れる九龍江で漁業や水上運搬業に従事しながら、長らく船上生活をつづけてきた「連家船漁民」と呼ばれる人々の生活を研究しはじめた私にとって、水上居民研究の本場ともいえる広東省へ赴き、彼らの暮らしぶりを肌で感じたいというのが、いつしか大きな望みとなっていた。

そんな中、2010年2月27日から3月18日までの日程で、派遣研究員として広東省中山大学の非物質文化遺産研究中心を訪れることができるという幸運に恵まれた。この滞在中、私は広東省に暮らす水上居民の歴史と現在の生活について把握することを研究課題とした。中山大学は、その前身であった嶺南大学時代から、珠江流域で生活する水上居民に関する研究に力を入れており、成果論文も多いため、滞在期間の大部分は大学での資料収集に充てられた。しかし後半の4日間は、劉曉春教授の

紹介で、中山大学のある広州市から300kmほど離れた汕尾市の漁村、Y新村を訪れることができた。

Y新村の眼前に広がる汕尾港は、中国の「全国六大特等漁港」にも数えられ、漁業や海運のさかんな港湾である。大小さまざまな漁船が並び、船に住む人こそみられないものの、出港前に船首で「船頭公」という神明に線香と紙銭を捧げ、豊漁と安全を願う夫婦の姿などをうかがうことができた。私はここで初めて、汕尾港に船を停泊させる人々が、「浅海漁民」・「紅衛漁民」・「瓠船漁民」と呼ばれる3つのタイプに分けられることを知った。

浅海漁民とは、以前から陸上に家を所有し、浅い海域で漁をおこなった人々を指している。彼らは、漁業のかたわら、農業をおこなうこともあったようである。紅衛漁民と瓠船漁民はいずれも、かつては陸上に土地や住居を所有せず、船で暮らしながら漁をおこなう水上居民であった。紅衛漁民とは、日中戦争前後に、珠江デルタ周辺や広西チワン族自治区から汕尾新港へ移動してきて、水深の深い海域で漁をした人々を指す。福建省南部と並ぶ閩南方言圏の汕尾にあって、紅衛漁民同士は現在でも日常的に、出身地域の方言である広東語を話すという。瓠船漁民とは、清の乾隆年間に汕尾の諸地域や隣の惠州から汕尾港へ移動し、中海と呼ばれる海域で漁をおこなった人々のことである。彼らは日常的に閩南方言を話し、中海と呼ばれる海域で漁をして汕尾へ帰港するという船上生活をつづけていた。この瓠船漁民の人々が1950年代になって手に入れた定住拠点が、現在のY新村である。

Y新村の人々は、日本から訪れた突然の来客をとて



も親切に迎えてくれ、彼らのあいだに伝わる「漁歌」の練習風景や、最近になって新しく建てたという村内の廟宇を快くみせてくれた。私が福建省の漳州市で連家船漁民の研究をしていることを告げると、漁民のおばあさんたちは「あら、私たちの祖先は皆漳州から来たのよ！だから、私たちも漳州と同じ閩南方言を話すの」と口をそろえ、私も甌船漁民と呼ばれる人々を、より身近に感じることができた。その一方で、福建省の連家船漁民と甌船漁民がともに廟宇の中で祀っている「媽祖」や「水仙爺」といった神明は、同じ名称で呼ばれても、そこで語られる由来は多少異なることがわかった。

たとえば、連家船漁民たちが祭祀する媽祖は、福建省莆田市の湄洲島出身とされ、航海や海上の安全を守る1人の女神である。他方、甌船漁民のあいだで媽祖は「大媽」・「二媽」・「三媽」という3姉妹として祀られ、廟宇にも3体の神像が安置されている。大媽・二媽・三媽の順に、長女（媽祖自身）・次女・三女を表すという。さらに、この3体の神像がこの廟宇へ至った経緯からは、中国特有の歴史事情がうかがえる。もともと媽祖三姉妹の神像は、汕尾港に浮かぶG島の海辺に安置されていたという。甌船漁民たちは、出港と帰港の際に必ずG島の媽祖三姉妹の前を通り、豊漁と航海の安全を祈ったという。その後、Y新村に土地を得てからも、漁民たちは漁に出るたび、ここを通過していた。しかし、1960年代に迷信打破運動が始まると、媽祖三姉妹の神像が燃やされることを危惧した漁民たちによって、それらの神像は当時革命とは無縁だった香港へ運ばれた。この経緯について詳細を聞く余裕がなく、どのような関係をたどり、香港のどこへ運ばれたのかわからないが、とにかく、媽祖三姉妹の神像は文化大革命の時期を無事に過ごすことができたのである。その後、各地で廟宇が復興し始めた1992年になって、媽祖三姉妹は香港から甌船漁民たちの元へ戻り、現在の廟宇が建てられた後に、ほかの神明とともに安置されることになったという。

水仙爺は水仙（尊）王とも呼ばれ、福建省の連家船漁民も甌船漁民も、村に建てられた廟宇の主神として祀っている。連家船漁民のあいだで水仙爺は戦国時代の楚の政治家であり詩人でもあった屈原が転化して水神となったものと考えられている。これに対して、甌船漁民たちによれば水仙爺とは、夏の国を開いた帝王とされる禹が神明となったものであるという。禹は大洪水を治めた大功をもつことから、水上の安全を司る神明となったと考えられているようである。

これまで福建省南部の河川下流域に位置する漁村でしか調査をしたことのなかった私にとって、汕尾港という大規模な海港を根拠地としてきた甌船漁民たちと出会えたことは、大きな収穫であった。とりわけ、福建省で連家船漁民と呼ばれる人々と、甌船漁民たちをとり巻く環境には共通する点も多く、それゆえに両者のあいだにある差異も引き立つという発見があった。たとえば、連家船漁民と甌船漁民はいずれも閩南方言を話す人々であり、共同で祭祀される神明には共通点もあった。また、どちらも陸上に定住する際、農村部ではなく比較的繁華な市街地にその根拠地を得て、現在でも漁業に従事する人が少なくないという点も似ている。しかし、詳しくみると、同じ名称、似通った発音で語られ、性格や誕辰も同じに見える神明が、異なる由来をもつことなどがわかった。こうした相違を小さなものとして切り捨てず、そこから両者をとり囲む社会についてより広い視点で理解する必要性を痛感した。



写真1 汕尾港



写真2 漁船で船頭公を祭祀する夫婦